

(2) 博士論文の和文要約

「人たる道」と心学

博士後期課程 国際日本専攻 5519004 船戸雅也

「人の道」という言葉とその概念は、どのような起源をもち、どのように受け継がれてきたのであろうか。近世の日本における思想界の主流をなしたのは、儒学、国学および神道であったが、それらに共通していたのは、「道」の探求、すなわち人がいかに生きるべきかの原則ないし原理としての「道」を明らかにすることを、中心的な目標としていた点だった。日本社会における「人の道」の原型は、おおよそ近世期に端を発し、多様な経路を通じて継承されてきたが、なかでも朱子学および陽明学を含む宋明「心学」が大きな通り道として機能していたと考えられよう。であれば、石田梅岩(1685-1744)が説いた教学、「人たる道」は、近世において東アジア儒学に由来する「道」が、日本において独特なる「人の道」として、変容されてゆく過程として位置付けることができるのではないだろうか。

1. 石田梅岩の思想と宋明心学

18世紀に、商人の実践的な道德規範として孝行、和合、勤勉、儉約、正直を説くとともに、開悟によって「心」を知るべきことを説いた梅岩の思想は、商家における奉公の経験に根差し、神道、儒教、仏教さらには老荘思想を包摂した。賤商観が蔓延っていた近世社会において、武士、農民、商人、それぞれに社会的役割を認める立場から、梅岩は商人の利益の正当性と、商人のあるべき生き方を説き、梅岩の教学は広い社会階層にひろがっていった。梅岩の思想には、「天地が万物を生み出し、人間もまたその天地に生み出される存在である」という、継承連続を善きものとする「生々」を軸とした生命観がみられ、朱子学の直接的な影響と、陽明学の特徴を見いだすことができる。梅岩における、人の「心」とは、「天地から生み出された際に授かった本来の性質」であり、「欲心」が含まれる。そして、「性」とは「人を含む万物が、天地から授かった本来の性質」であり、「欲心」は含まれず「無心」であって、「生々を継ぐ善なる」ものであった。宋明「心学」から包摂した、継承連続を善とする自然観と、万物一体の生命観を思想的基盤とする梅岩の思想は、近世日本における「心学」の一系譜であったといえるだろう。

2. 石田梅岩の「人たる道」と伊藤仁斎の「道」

『都鄙問答』には、伊藤仁斎(1627-1705)の教説を批判的に参照していると考えられる記述と、追従している記述の両方が併存している。仁斎は、「天理」と「人性」を直接結び付ける朱子学の根本概念を否定し、天地を貫く「理」が人間においても内在するわけではないと考えた。梅岩は心性論において、朱子学的「性」「理」の概念を敷衍し、仁斎の説を受け入れなかったが、『論語』、『孟子』に立ち返るべきだという主張、そして「生生化化」や「死物と活物」にみられる、仁斎における中心的な命題や概念を消化し、それを自らの教説に摂り込んでいるように思われる。仁斎における「道」とは、朱子学や老荘思想に依拠する高遠な議論を回避して、卑近な道德、人倫日用の在り方を求めることだった。梅岩の靈性を内包した本体論の根拠には、仁斎を経由した易経に基づく宇宙観を継承したうえで、仁斎が採用しなかった神国観念に由来し、陽明学とも符合する「天人合一」、「形に由る心」が挙げられる。梅岩は神道的「神国」観念を保ち続けたうえで、朱子学の「性理」論を肯定している点では、仁斎と相いれるものではなかった。しかし、仁斎学における「語孟」主義に従い、「生々」観に共感し、「人の道」を継承しながらも、「天人合

一」を知る開悟、「形に由る心」という靈性を内包したその思想は、数多の門弟たちに引き継がれ、やがては仁齋学よりも広い地域、広い階層にひろがっていった。

3. 石門心学における『論語』解釈

近世の東アジア儒学における、重要な道徳的概念のひとつとして「仁」が挙げられる。「仁」とはなにか、という問いは、儒学において中心的な命題であり、『論語』の「克己復礼」章では、まさに「仁とはなにか」が問われている。梅岩のみならず、手島堵庵(1718-86)、西川晩翠(?-1857)が、この章の解釈を展開していることは、石門心学を東アジア儒学の系譜のなかに位置づける根拠のひとつとして挙げられよう。「克己復礼」の「克己」は、梅岩、堵庵、そして晩翠ともに、「己に克つ」、すなわち私心に打ち勝つ、欲心を耐え忍ぶ、という意味で解釈されている。自分の欲望や感情を制御するという解釈は、概ね共有されており、伝統的な東アジア儒学においても同様な文脈で引用されてきた。晩翠の道話においては、「克己復礼」は「耐え忍ぶ」とことと単純化、平易化され、辛抱と忍耐が家の和合を生み、それが家の永続や繁栄に繋がるということが説かれている。石門心学の後継者たちによる通俗道徳の平易化は、結果的として儒学經典における道徳規範が、近世の日本列島において広範囲の庶民階層に浸透した契機となったといえる。近世社会は18世紀半ばの宝暦・天明期を境にして、前期の形成発展段階から後期の解体、そして次の時代をつくりだす動きが表面化する段階へと二つに分けることができるが、石門心学が伝播し、幕末に蝦夷地に到達するまでの時期は、その後期に該当し、武士と一般民衆とのあいだの格差のなかに、中間的な身分階層が徐々に形成された。石門心学のひろがりを買った彼らは、その中間的位置から都市および農村の庶民へ、さらには武士へ向けて『論語』をはじめとする經書の平易化をおこなった。そのような平易化は、儒学經典における道徳規範が、近世の日本社会において広範囲に浸透する契機のひとつであったといえる。人が生きるべき「道」を探究することを庶民に広めた石門心学の役割は、そのように評価されるべきであろう。

4. 西川晩翠『心学道話』における「人の道」と石門心学の連続性

19世紀半ばに、西川晩翠は松前藩における石門心学の普及のために江戸から招聘され、講舎が設立されるに至る過程で重要な役割を担った。晩翠は手島堵庵の教説を継承し、中沢道二の語り口を援用したが、晩翠『心学道話』の心性論にみられる「本心」、「道」は、手島堵庵が創唱した「本心」、中沢道二(1725-1803)が説いた「道」とも異なっており、「天理」と人間主体の連関、運動性についての志向には変化がみられる。晩翠の教説には、梅岩が説いた「天人合一」の世界観と生命継承の自然観への回帰がみられる。梅岩は、「天理」と運動する生まれもった「性」を探究する思想を展開したが、そこには「天理」と「性」の運動から距離をとった伊藤仁斎の思想に対する離反をみることができる。手島堵庵は「天理」とは距離を置きながらも、私欲や雑念を排除するための弛まぬ鍛錬を前提とする、「本心」を追求する思想を説いた。中沢道二の「道」は個人を救済し、家や社会の和合を実現する、人として歩むべき道であり、梅岩の形而上学とは異なり、天から受けた「土」という形質から生まれる万物には天理が宿っていることになる。であれば、道二は堵庵が距離をとった「天理」へ再接近していることになる。そして、西川晩翠の「人の道」は、道二の「道」をふまえながらも、梅岩学における概念を追認しており、道二を「天理」への再接近とするならば、晩翠は梅岩学の「天理」への回帰、とみることができる。

5. 西川晩翠『心学道話』における死生論と救済

西川晩翠の手録本『心学道話』には、仏教の素養にもとづく死生論が展開されている。生と死は一對のものであるから、避けることはできないものであって、死を過剰に恐れるべきではない。とはいえ、生きている限りは死を意識

することが必要であり、死を前提としない生などあり得ない。死を前提としてこそ、生きることに意味があることを、幕末期に社会的不安のなかに生きる聴衆に語る晩翠の教説は、救済の思想として捉えることができる。晩翠の教説には思想的な再構成の痕跡を見出すことは難しいが、これまで石門心学の衰退期とされてきた幕末において、晩翠が先人たちの心性論と実践倫理を解釈して説き、死生論による救済を企図しつつ前向きな活力を人々に与えようとする構えは記憶されて然るべきだろう。梅岩とその門弟たちによる「心」の思想は、書物による学問を享受することができなかった商人の主体形成を企図していたのであろう。しかし、梅岩学および石門心学は、儒教的「天」の思想を基調としていたから、伝統的な労働様式を基礎とした小生産を営む商人たちの「職分」も、「天」から与えられたものに他ならない。であればこそ、商品経済が生み出す矛盾を「私欲」に求めるよりほかはなかった。幕末の東北では、豪農の心学者、早田弘道が打ちこわしの標的となっており、「天」から受けた「職分」を肯定する石門心学は、社会制度を疑問視するひとびとと立場を共有するものではないとみられていたことが分かる。この点を、明治維新という社会変革を石門心学が乗り越えられなかった要因のひとつとして挙げることができよう。

6. 「心学」と人の道

近世の日本における社会思想を参照するうえで、石門心学の門弟たちが残した教説を読み解き、その思想の継続と変遷を辿ることは避けられまい。そこには、17世紀以降に蓄積されてきた道德観、人生観、社会規範、宗教観の原型なるものが映し出されている。未来において、日本における価値判断とはなにか、を考えるうえで軸となりうる要素を、そこから取り出すことができるように思う。石田梅岩は、仁斎学を経由して宋明の心学を採り込んだ。その門弟、手島堵庵は梅岩の超越的「天」の本体論を再編した。そして、彼らに続いた中沢道二や西川晩翠は仏教の素養を生かし、救済の思想を展開した。石門心学は明治維新以降、社会思想としての機能を失ったかにみえるが、石門心学を経由した「人の道」は、現代の日本においても、ひとびとの価値基準、社会通念、宗教観が交錯する、心のなかの大路として生きているといえるのではないだろうか。幕末に石門心学の門弟たちは、梅岩学における「生命連続の肯定」と「天人合一」を継承したうえで、救済を志向する「死生観」と平易な「人の道」を説いた。「生命連続観」や「万物一体の自然観」が、日本人の精神性の深部を形作っているものだとすれば、石門心学が人々に語りかけた、「人の道」における心性論、世界認識論、死生観は、いまなお日本列島に生きるひとびとが内在している価値基準、社会通念に、影響を与えているものととらえることができる。（了）